粉鉢也

〔和漢茶誌二〕建水　以杉製之、一名滴器、

世用飜覆滴三字、漢書曰、建瓴水、今從之、古多用銅器、榲杉之製、珠光之所始作、後世諸家皆用之、自珠光以降、其形不變、以榲杉一版屈曲爲之、相合處櫻皮縫之、內外無漆、尺度見圖書

又曰、後世或雖有鐵銅瓷三物、皆借其名稱建水、其銅制自古諸家所尙者、蠻人所造白銅也、形有大小低昂、間有胡銅之制、其價貴賤萬變也、南蠻白銅上、朝鮮次之、本邦白銅又次之、然中華胡銅有勝朝鮮者、以其品形有優劣也、擇其品而用之、則不可以限於南蠻也、

〔千家茶事不白齋聞書〕水こぼしの事

一曲、紹鷗好、　龜ノふた、ナンバン物ナリ、宜もの、　骨ハキ、水こぼしに用、唐に而食ノ時、骨ヲ吐、ものにてかねなり、　からかね、○略中　右之外、燒物、かねの物、何れなり共、其宜を見合用、　水こぼし利休銘大脇指、黃瀨戶百會茶ニ出ル名物也、樂燒ニ寫、

〔茶道早合點下〕水こぼし　げすいつぼなり

水こぼしは水屋に置なり、面桶、佐張、南蠻物、備前物、紫香城、其外諸國名物多し、茶室へ持て出て遣ふ、

〔茶道筌蹄五〕建水本字受汚

唐物金類

砂張　平コボシのはじめなり　紺羅　砂張のうつしなり　棒ノ先　古說不分明也

合子　物をはかる合なり○略圖　骨吐　文字のごとし　鉢ノ子　則鐵鉢の事なり　モウル金

古染付

雲堂　松竹梅　唐花